48年の女性像 (1)

Marie d' Agoult または Daniel Stern

加藤節子

フランスの1848年2月の革命をめぐる多くの闘士たち，いわゆる "Vieilles Barbes" にまじって何人かの女性たちが時代の洗礼をうけて華々しく，あるいは地味に，また真摯にこの革命の時期を生きた。二月革命が虐げられた階級の解放を理念の一つとしているならば，サンシモン主義をはじめ 19 世紀のほとんどすべての社会主義者たちはプロレタリヤ解放のみならず，女性解放の問題を何らかの形で取上げている。二月革命は民衆を主人公として民衆に様々の角度から照明があてられることになるが，同時に民衆と同じく低い地位におかれていた女性もまた新たな取りくむべき問題として意識されはじめたといえよう。サンシモン主義者とりわけ Enfantin は女性を極度にもちあげてこれに新時代のメシヤの役割を与え，女性の本能的な能力こそ神秘なものとのとの交流ができるのであるというミスチックな説をとく。これは女性の能力や知性よりも女性の聖性を問題にした典型的なロマン主義的社会主義の一例であろう。また Fourier 派はもっと現実的でとりわけ女性の教育や社会的平等をとり上げる。しかしこれらの学説にもかかわらず現実には 48 年には，女性問題としては離婚制度，教育の改革，アカデミーへの被選挙資格などの要求にとどまっている。こうした社会を背景に 48 年の刻印をうけた女性のたどった軌跡のいくつかをたどってみたいと思う。

L'Emancipation de la Femme (1845年遺稿) に "La femme est paria de naissance, serve de condition, malheureue par devoir" とか "L'homme le plus opprimé peut opprimer un être, qui est sa femme! Elle est la prolétaire

du prolétaire même." という言葉をのこした Flora Tristan はフェミニスムの問題を含めて 48 年の革命を予告した最もラディカルな女性である。女性の解放即プロレタリヤの解放であると確信し，女工の職業組織を作らせたり，初めて労働者の団結を唱え，小冊子 *Union Ourière* を携えて同職組合の巡歴コースをたどってその宣教の旅へと出発した Ganguin の祖母 Flora は，しかし彼女の労の結実をみることなく 1844 年 11 月にボルドーで過労のため斃れた。彼女が 48 年の時点まで生きていたならば第二共和制の方向づけに大きな寄与をしたであろうにと惜しまれるのである。Flora Tristan の必ずしも理解者とはいえないが多少とも交渉をもったことのある George Sand やまた Marie d' Agoult は Flora のあまりに教祖的且先鋭的な考え方に対して反感なり，批判的な態度を示している。しかし労働者の思想的指導者を自任する Flora に何らかの刺激を受けたことは否めないであろうし，特に Sand はその後彼女自身，目覚めた労働者たちの友となり，よき理解者となり，革命に深くアンガジェした女性の一人であったことは前稿[1]で述べた。Sand にしても Marie d' Agoult にしてもフェミニスムの問題を回避したわけではない。ただピトレスクな Enfantin の運動や女闘士たちの運動には背を向けた。Sand も Marie d' Agoult[2] もこの問題をとり上げてはいるが，彼女たちは一般的な理論としてよりもむしろ情念の解放，愛の解放という形でまず自らを解放し，更に事実上政治面でもこれを実践したといえるだろう。Marie は Sand の小説 *Lélia*, *Valentine*, *Indiana* など社会に反抗するヒロインを地でいったというより最高の姿で顕揚してくれたとして，初め Sand の熱狂的な友情を得た。王政復古期の貴族たちの住むハイソサエティ Saint-Germain 街の一流サロンの花形女主人であった Marie d' Agoult がその地位を自ら捨てて，名著 *Histoire de la Révolution de 1848* を著すに至るまでの波瀾に富んだ生き方には，特権階級の名夫人が社会主義ロマンチシズムを体現した 48 年人の一典型と考えられよう。

*　　*　　*

まず彼女の前歴，"共和主義者" として脱皮するまでの略歴から始めねばなるまい。Marie d' Agoult はフランス人の父，亡命中の貴族で軍人の François de Flavigny と Bethmann 兄弟銀行の娘ですでに未亡人であった Marie Elizabeth

Bethmann, プロテスタントで大ブルジョアのドイツ人との結婚によって生まれた娘である。この両極ほど違った両親をもったこと自体すでに彼女のその後の生活の振幅の大きさを予想させるのである。1805年, Francfort Sur Mein で Marie は生まれた。Francfort から Dresde, Vienne, Munch と転々とした後, この一家は 1809年フランスに戻って来た。そして Tourenne 地方に宏荘な邸宅を買い, 豊かな生活を愉しんでいた。グリムの童話をはじめモーツァルト, ハイドンの音楽によってドイツの教養を身につけると共に, 父方の祖母からはラテン, フランス文学の教育を授けられ, カトリックの洗礼を受けた。1815年王政復古時代が始まるが, またナポレオンの百日天下によって, 熱烈な王党派である父は家族の安全を考えてドイツの母方の祖母の家に避難させた。Marie は寄宿舎に入れられてドイツ人として教育される。この時期祖母の家を訪問したゲーテ翁とも会っている。1816年ルイ 18 世の帰国と共に彼女たちも再びフランスの地をふむことになる。以後 grande dame としての教養の数々を身につけていくと同時に読書の好きな彼女はロマン派の作品をむさぼり読んだ。とりわけ Werther, René, Adolphe, Manfred や Walter Scott, Byron の作品は愛読書であった。1819 年父の死後, 一家は再び Francfort へ向い兄 Maurice は祖母の銀行で働くが, Marie はその後パリの貴族の子女のための Sacré-Coeur 修道院 (Hôtel Biron) で二年間過し, 教育を完成させた。

こうして社交界入りをした才媛, 金持ちで古い家柄の貴族の娘 Marie は, すばらしい未来と結婚が約束されていた。Vendeé 地方の古い貴族である彼女の家は ultra-royaliste の社会に属していた。タイムマシンによって大革命以前に逆戻りしたような生活に固執し, 新らしい思想も人々も頑強に受けつけない偏狭な社会であった。一方ロマン派の詩に養われ永遠の恋を夢みる少女であった Marie は誤解から一度失恋を味うが, その後は母のすすめで Charles d' Agoult 伯爵と結婚した。この結婚はシャルル十世も署名した格式の高いもので, Marie はこうしてフランスの最も高貴な家柄の人々すべてと付合いを始めるようになった。王政復古期の貴族のサロンで Marie はその知性と美貌, エスプリで君臨するようになった。そして七月革命の後 Louis-Philippe の時代となると窮屈な生活から解放されて, 彼女は自分のサロンをもとうと決心し

た。Lamartine, A. de Vigny, Sainte-Beuve, E. Sue も出入りしていた Mme Récamier, princesse Belgiojoso, duchesse de Maillé, duchesse de la Bourdonnaye の有名サロンに倣って彼女も身分や意見に関係なく人々をサロンに受け入れた。こうして子供も二人もうけて一見何不足ない生活を送っていた Marie が，いまだ無名の Franz Liszt と駆落ちして，家族も名誉もすべてふりすててしまうにはよほどの精神の自由と強靭さが必要であったろう。

*　　*　　*

〔新らしい友人たち〕　この段階の Marie d' Agoult はしかしながら，赤い革命帽をかぶって Théâtre Français に現われ，舞台の Lucrèce よりもこの新らしいモードに桟敷の人々の目をひきつけて "favorite de la République" と呼ばれたり，また自ら生きた革命を「48年革命史」という大部の書にまとめ上げた Daniel Stern にいたるまでにはまだ幾里程もへなければならない。まず革命までの道程をこの面から照明をあててみよう。

まずサンシモン主義者でまた Lamennais 師に傾倒していた Franz Liszt と同棲した五年間の生活で Marie は外面的にもまた内面的にも 180° の転換を経験したであろう。スイスでの二人の水入らずの生活は Sand-Musset や Mme de Staël-B.Constant の生活と比較されたりするが，ここでは二人の生活に立入ることはさけ，ただフランスにいた時のような社交生活がほとんどなかったことを指摘するにとどめよう。しかしそれでも何人かの新らしい友人ができた。

Histoire des Francais の著者，歴史家 Sismonde de Sismondi，植物学者 Pyrane de Candolle，東洋学者 Alphonse Denis，などとのつきあい，また親しい友人となった James Fanny は Journal de Genève 紙と急進リベラリスムを標榜する l' Europe Centrale 紙の創刊者で後にジュネーヴ政府を率いることになるが，彼のもたらしてくれる数々の情報や彼の自由な物の考え方が Saint-Germain 街の偏見やとりすましたお上品さになれていた Marie の精神に清新な風と広い展望を与えたことであろう。またスイスがすでに共和制を採用しているところから Marie は一歩先んじて共和国の経験をすることになる。また Adolphe Pictet，博学な哲学者，詩人でジュネーヴ・アカデミーの美学の教師も魅力ある人物で，彼らの生活を楽しいものにしてくれた。

George Sand との出会いは d' Agoult に様々の意味でとりわけ大きい影響を与えずにはいられなかった。Sand とはすでにスイス逃避行以前から Liszt の紹介によって面識があり，*Piffoël* と《une belle comtesse aux cheveux blondes》の *Arabella* は互に讃美しあっていたが，この逃避生活のうちに二人は一層親交を深めた。Sand は招かれて二人の子供と一緒に彼らの愛の巣を訪れ，はめをはずした陽気な日を過したことは *Lettre d'un voyageur* に書かれているし，また小説 *Simon* を彼女に献じたりしている。Liszt-d'Agoult は一時パリに戻って Hôtel de France に滞在したことがある。この時 d'Agoult は手紙で一緒のホテルに住んで大きなサロンを共同で使わないかと Sand に提案している。Sand は喜んでこの申し出を受け入れ，互にサロンの客を紹介しあった。また時には合同のサロンを開くこともあった。Sand の側には Lamennais 師，Charles Didier, Pierre Leroux, Sainte-Beuve, Pelletin, Heine などが常連として出入りしていた。Liszt は Rossini, Paganini, Meyerbeer, Chopin などを連れてきた。また d'Agoult の Saint-Germain 街時代の常連であった人々の中で，彼女を見捨てなかった E. Sue, d' Eckestein 男爵，またポーランドの亡命者 Mickiewicz や Bernard Potocki など国際色豊かである。やがて Liszt と Marie はダンテの国あこがれのイタリヤに旅立つ。しかしこの旅も二人の間にだんだん深まりつつあったひびを回復することは出来なくて，この旅の終りに二人は別居することにふみきる。Liszt はヨーロッパ演奏旅行に，Marie は Paris へ戻り，三人の子供たちは Liszt の母親にあづけられることになった。Marie は Neuve-des-Mathurins 街に豪華な居を構えて独立生活の準備をする。Liszt との文通はその後もつづき互に精神的なつながりは絶つことは出来ない。

ある日劇場で昔の友人 Delphine Gay に会った Marie は彼女との交際を再開した。Delphine は今は Vicomte de Launay というペンネームで La Presse 紙に活躍している優れた雑報記者になっていて La Presse 紙の編集長 Emile de Girardin の妻である。昔の上流社会の paria となった Marie d' Agoult に同情した Delphine は自分の文学サロンに Marie を招いて大作家たちに会わせた。ここで Lamartine, Th. Gautier, V. Hugo などの知己も得て，社交

界への復帰の準備もでき，いよいよ彼女は自分のサロンを開いた。昔からの常連であった Alfred de Vigny，をはじめ B. Potocki, Ronchaud, Lehmann, Sainte-Beuve, E. Sue, Charles Didier, Lamennais 師など新らしい友人たちがやって来た。また Emile de Girardin も姿をみせるようになり，彼女はようやく昔日の自信をとりもどした。Saint-Germain の彼女のサロンで *Frégate* という場違いな詩を朗読して並居る貴族たちを唖然とさせたこともある A. de Vigny と Marie には共通な面がある。「二人とももとは正統王朝派でブルジョアが大きな顔をしている七月王政に対する反感から共和主義者となった」ことであり，「彼らは貴族の知性と優雅さで彩どった共和国なるものを描いていた[3]」。ストイックで寡黙な Vigny も 48 年には情熱を燃やし，選挙にうってでるが落選して幻滅を味い，再び武人的諦感にもどるのである。更にまた Lamartine とはやはり貴族出身であることとリベラルな面で親近感を抱いていた。革命の勃発と共に彼女のサロンの大切な客 Lamartine が革命の英雄になったことに彼女は有頂天になる。「彼の力強いやさしい声が革命という恐ろしい言葉を親しみのあるものにしてしまったのです。詩の金色の雲の中に現れ，ラマルチーヌの名を想像させる革命は何ら恐ろしいものではありません。人々は理想的な姿の下に革命をみることになったのです。」と彼女は書いている。

「顔は蒼白く，注意深いが少し皮肉な観察者，おだやかで全く礼儀正しい人物，そして風変りな人物……[5]」と Marie に評されている Emile de Girardin はかなり頻繁に彼女の家に出入りする讃美者の一人である。政治の舞台裏や駆け引き，あらゆる政治家の情報に通じている E. de Girardin によって Marie は直接政治への関心を目覚されたと言ってよいだろう。Liszt に宛てた 1840 年 11 月 29 日付の書簡にはこう書いている。「彼は私が大へん有能だと思っているようで私に仕事をさせようとしております。彼は私を文筆の仕事にふみきらせ，仕事の便宜を与えてくれるでしょう。あなたは私が政治に興味をもちはじめたことを御存じでしょう。彼は今の政治家について大変面白く話してくれ，進歩や政治学についての彼自身の思想を聞かせてくれて，私の政治への関心を一そう深めてくれました。」

更に Sand のサロンで知りあった P. Leroux や Lamennais 師によって共

和思想を学んだであろう。また若者の動き，学生のデモに大へん注意を払っていた Marie d' Agoult は Louis Philippe の政府にさしとめられることになる Michelet の講義を学生たちに混って聴講にいくという精神の若さがあり，臨時政府の Lamartine に対して若い人たちの意見をきくようすすめたという話も頷けるのである。革命が近ずくといち早くそれを察知した彼女は Lamartine をはじめ，デモクラシーを大衆の意見へと導いていく先覚者たち P. Duprat, Littré, A. Petetin, E. Pelletan などをサロンに集めていた。こうして 48 年のチャンピオンとなる多くの新らしい友人たちにかこまれて彼女は大きく生長していくのである。

〔Daniel Stern〕　George Sand との交際によって刺激され，彼女の心に女流作家に対するあこがれと野心が生まれ，Liszt がそれを煽ったのであろうか。Marie は Sand に冗談めかして文学的野心をほのめかしたりするが，まだ逡巡する方が強く次のような手紙も書いている。「Franz が私の出来心の文学的野心についてあなたに申し上げることを本気になさらないで下さい。今日ものを書こうとするには天才やあなたのように博識になるための執拗な労力と不撓不屈の作業がいります。私には天才はありませんし，それに才能を得るためには怠け者ですし……。」(1835 年 11 月 22 日)

ところが d'Agoult と Sand の関係は 1839 年 9 月頃より次第に冷たくなっていったようである。原因はいろいろ推測されているが，両方のサロンに出入りした共通の友人であったスペイン大使夫人 La Marliani のはしたない告げ口などが大きく作用したらしい。Liszt-Marie がイタリヤ旅行中に Sand は彼らにも行く先をつげず，Chopin や二人の子供とマジョルカ島に身をかくした。

一方 Marie の教養の広さ，国際感覚，数ヵ国語の知識や友人関係のひろさを高く買っていた Emile de Girardin は彼女に執筆をしきりにすすめた。Marie は最初当時画壇の大御所 Delaroche について鋭い男性的な批評をすることから始めた。d' Agoult と署名することは家族に迷惑することを考えて，ペンネームを使うことにしたと *Memoires* に記されている。リストとの間の一人息子 Daniel の名と，自分が半ばドイツ人であることを意識してドイツ語 Stern を苗字にした。こうして Daniel Stern という綺羅星が一つ誕生した。J. Cassou

も言う如く「Marie d' Agoult の場合，情熱の挫折が乗り切られ，究極的な知恵へと統合されたことは見事である。[6]」あれ程の大胆な愛によって社会に挑戦し，社会におしつぶされた後，ダグー伯爵夫人は自らを葬り，Daniel Stern と生れかわり，最も人間的な現実としての社会の中で変貌していったのである。

Sand の *Compagnon du Tour de France* に対する批評，労働者を主人公に選んだことに対する評価はしながらも，プロットや人物の不自然さをきびしく批判した文章が 1841 年 1 月に La Presse 紙に ≪inconnue≫ の署名で掲載され話題となった。Sand との関係が冷えたのと相まって Sand に対するライバル意識が猛然とわいてきたらしい。

Daniel Stern はその後，幅広い教養を縦横に駆使して *La Cathedrale de Cologne, les Salons, Georges Herwegh et les hégeliens politiques, Madame d' Arnim, Profession de foi de deux poètes Freiligrath et Henri Heine, Emerson* など数々の論説を La Presse, Revue de Deux Mondes, Revue Indépendonte, Revue Germanique などに執筆している。*Hervé, Julien, Valentine* (1842-46) などの中篇小説，リストとの恋を扱った *Nélida* (1846) なども手がけたが，彼女自身小説ではとうてい Sand を凌駕できず，小説家の才能のないことを認めて別の方向を模索することになる。*Essai sur la Liberté* (1847) は文体の簡潔さとラディカルな論題で注目され，彼女の本来の才能の生かされた成功作である。

「*Essai* は私のまわりに多くの若い人々，共和主義者，人道主義者，Revue Independante のグループ，多少とも公けに共和国を説く人たち，例えば Guépin 博士〔医者，著述家 1850-1873〕Eugene Pelletan などをひきつけた。しかし私は立憲王制に忠実なリベラル陣営にも友人たちがいた。例えば de Viel-Castel, Mignet〔作家，歴史家 1796-1884〕, de Lagrenée〔外交官 1800-1862〕de Bois-le-Comte（著述家，外交官），Delarue 将軍（その妹と私は友達である）。私は又，多くの外国人にも会っていた。Henry Bulwer〔イギリス外交官，作家〕は私にイギリスの思想を伝えてくれた。d' Eckstein 男爵，Henri Heine, Lubonowski 公，Franz de Schoenborn 伯，Confalonieri〔イタリヤ愛国者〕, George Herweg〔ドイツ，詩人 1817-1875〕, G. S…, madame L,…, Emerson

〔アメリカ哲学者詩人〕, Georges…, Bakounine〔ロシヤ，革命家 1814～76〕, H,…」と *Mémoires* に記している。(〔 〕は 1927 年版 Mémoires の註)

〔Lettres Républicaines〕　革命の前日「2月 22 日，Marie は議会で Odilon Barrot の Guizot 攻撃演説を聞いた。23 日，共和主義者たちの間の不一致を確かめ，暴動は指導されたものでなく自然発生的なものであることを確認する。24 日 9 時，Louis Philippe のこれが最後になる国民軍閲兵を参観した後，理工科大学につくられたバリケードを見にいく。王の退位，摂政の予想，共和国宣言と忘備録に記し，≪Lamartine très grand≫ とつけ加える[7]」これが革命の日の足どりである。

更に 26 日には「私の友人たちは皆権力の座につくだろう」と記し，彼女は夢みたことがすべて実現しそうな輝かしい予想に胸ふくらみ，野心に燃えている。Lamartine は彼女のサロンの偉い客であり，Lamennais 師は共和国に重要な役割を演ずるであろう。Lamartine を自宅に招いて Lamennais 師の作った憲法草案をきく会などをもったりしている。Lamennais 師の忠実な秘書 Auguste Barbet はたえず彼女と連絡をとっている。Revue Independante 紙の編集長 Pascal Duprat をも彼女は自分の傘下におこうとしている。彼は 4 月選挙には代議士になっている。また複雑な動きをする Emile de Girardin にも時々会って情報を得ているし，一方ではイカリーの旅を夢みる Cabet とも政治的遊戯をたやさない。Proudhon をも飼いならしている。折しも Liszt との関係はすっかり終ってしまって，≪Six pouces de neige sur vingt pieds de lave≫ の彼女はその情熱のすべてを革命に注ぐのである。

3 月 5 日早速 Lamartine のもとに出向いて会見を約してくる。Lamartine はおそらく彼女と距離をおこうとしたのであろうが，彼女の能力を認めざるを得なかったのであろう。外交官として適当な人物のリストを提出させたりしている。Marie はまた Girardin 夫人の役にとって代って取りまき連に役職の分配をする。Sand が Ledru-Rollin に働きかけて共和国委員のメンバーの人選にかかわったのと期を一にしている。Marie の忠実な騎士ともいうべき Louis de Ronchaud が彼女の取りもちによって，Lamartine 付事務長の地位につくことができ，彼は Lamartine の言葉を逐一 Marie に伝えることが出来るようにな

った。こうして4月選挙の後，Lamartine が最高票で当選した時は彼女は得意の絶頂にあったろう。5月4日第一回議会を Lamartine 夫人の傍で参観する。しかし保守派の議会勢力が強くなって Ledru-Rollin を支持しようとした Lamartine の権力が弱められ，また一方 Lamartine の Marie d' Agoult に対する態度も何らかの理由で疎遠になった。

ところで George Sand が革命が始まると Nohant から上京して Ledru-Rollin と組んで政治活動を開始し，Bulletin de la République の執筆などに携ったことに対して Marie は大いに対抗意識を燃やし Lamaritne に働きかけたことは上述の如くであるが，更に Sand が Lettre au peuple や Un mot à la classe moyennne など多くの檄文や論説を Revue Independante, l' Eclaireur de l' Indre, Cause du peuple, Siècle, Réforme, Vraie République 紙などに発表すると，この方面こそ彼女の本領とばかり d' Agoult は Courier Français 紙（P. Duprat 編集長，ナシオナル紙の左派執筆陣）に Lettres Républicaines なるものを5月25日から12月7日まで十数通書いている。例えば Prince de Joinville 宛，Mickiewicz 宛，Fany Lewald 宛，Louis de Ronchaud 宛など主に自分の身近な人々に宛てた書簡という形で論説や政治状況解説となっている。これらの内容は 48 年革命史の中にとりこまれるが，彼女の気持をもっとあらわに出した資料となっている。

Lettres Républicaines によって表明された彼女の見解のいくつかをここに述べることにしよう。手紙は5月25日，即ち晋選の一ヵ月後，5月15日のデモ隊議会占拠の後，6月暴動の一ヵ月前という時点から始まって，政局の刻々の移り変りをまざまざと写しとった手紙である。まずオルレアン家の Joinville 公が晋選の趨勢をみて補欠選挙に立候補しようとする意図を察知して，それを断念させようと説得しつつ，革命の意味を説き，民衆の良識を讃える。革命は王位の簒奪ではなくて解放の長い歴史の必然的結果である。社会問題を解決できるのは一人の偉人ではなくて，民衆の共同の働きによるものとして，民衆の力に無限の信頼をよせる彼女の共和主義の信仰告白となっている。6月5日には立憲議会の政党地図を説明し，晋選の結果に失望を表明する。あまりに“穏健”すぎるというか保守色の強い顔ぶれ，特に議長 Buchez をはじめとする年嵩の

議員の多いことが新らしい方向への道を阻む。しかし共和国である限り将来選挙による改善の余地があるとして一概に失望しているのではない。

六月事件に対する彼女の態度は Sand のそれと著しく異るところである。この暴動は「悲劇的あやまちであり，歎かわしい誤解」からきたものとする。民衆は徒党にそそのかされてこの暴動に走ったのだからと，議会に許しを乞う。「深刻な貧困の中で長年沈黙を守っていた暴動の芽が非常識なユートピスト達によって煽られた上，突如希望がうちきられたことによって更に堪えがたいものになった貧困の中でそれが醸成されていったとしても，党派の人々や野心を満足させえなかった人々が民衆の怒と苦しみのこの漠とした感情を恐るべき陰謀へと組織したのです。」（第五の手紙, Mickiewicz 宛）こうした考え方はとりわけ Eugène Sue の小説など livresque なものからきたのであろう。「彼らが憎悪と復讐へと駆りたてるのである。彼らが苦い胆汁を貧しい人々の愛すべき心の中に注ぐのだ。彼らが騒擾へと招き，最もよき魂の奥にも眠っている悪い本能を目覚させるのだ。彼らが財産に強迫と呪詛をなげ，それだけが人類にのしかかるあらゆる悪の源として財産を弾劾するのだ。……[8]」

しかし，Louis Blanc や Proudhon をこのユートピストに入れているのではない。彼女は Louis Blanc の説を次のように単純に要約する。「個人の自由と私企業を廃し，国民作業場の形で組織され，給与の平等に基いて審議会で管理された集団産業を国家のものとする。」Proudhon に対してはより理解を示し，「信用と交換の組織」はより科学的であるとする[9]。しかしそれにしても彼女はこうした理論家に組するのではなく，政治家による現実的な政治により信頼をおく。

六月事件の主役 Cavaignac に対しては共和国の救い主として敬意を表する。共和制を維持するためには流血も仕方のないことである。共和思想は Lamartine にあっては信仰に Cavaignac にあっては力に体現されているのだ。*Suppliantes*（8月13日）では英雄的に戦ったが，欺かれて罪を犯した民衆をアメリカに送ることなく，アルジェリアで植民地開拓に行かせるよう嘆願する。

Sand が「手はじめに民衆を殺戮する共和国などもう信じません」と言い切ったのと大きな距りがみられ，Cavaignac 支持も Lamartine の代弁者たる

Marie としてみれば頷けるのである。彼女にとって Lamartine は二月革命の理念そのものである。この詩人の共和国プログラムとしては普通選挙，教会と国家の分離，奴隷制と死刑廃止などである。Lamartine が議会で勢力を失っていくに比例して Thiers が前面に出てき，その巧みな術策によって共和国の息の根を事実上とめていく。5月15日議会占拠事件を調査する Commission d'enquête はその責任を臨時政府にまで遡及させていく。Poitiers 街に陣どった Thiers 一派はカトリック僧侶 Montalembert と組んで，Socialisme か Catholique か二者択一を民衆にせまる。二月以来民衆が獲得した権利を次々とつぶしていく革命の墓堀人 Thiers は，Lamartine の最も烈しい対立者として描かれている。

9月2日のブルボン家の Henri V に宛てた手紙には，Prince de Joinville に宛てたものと異って，正統王朝の過去に対する尊敬，自分の故郷に対する親しみのような感情がよみとれる。歴史的且詩的な偉大さを人々の心にのこして，ブルボン家もまた歴史の必然たる共和国へ敬意を表さねばならない。「共和国のみがあらゆる異質の要素を無理なく同化しうるにたる柔軟な形体と強力な活力をもっている。この共和制はどこでも中心であって外縁はどこにもない球体である。これはあらゆる現代文明を構成し錯綜する無数の思想，習慣，要望，傾向を包みこみうる唯一の状態なのである。」大革命以来の熱病も空想も，流血も偉大さも絶望もすべて共和国の属性であり，この不安定さの中で大きく振れながら共和国はすべてを消化していくのであると Marie はヘーゲル精神に則った解釈を述べている。

Louis Bonaparte に関してはナポレオンの遺骨の帰還以来 Lamartine がことある毎に警戒の声をあげているのと呼応して，Marie も補欠選挙で選ばれた Louis Napoléon Bonaparte の危険性について述べ，また帝政のサーベルをちらつかせている Napoléon を選出した民衆の恥と愚かさを声高に非難する。大統領に選ばれるまでの Bonaparte の側近の策略，着々と布石していく様が48年革命史にはまざまざと描かれている。

こうした政治思想問題を扱う論文においては Daniel Stern は文体なり論旨の明快さの点で Sand を凌ぐことをつけ加えねばならない。Sand の論説は真

情にあふれたものであるが現実から理想へと一足とびにとんでしまう安直さが目だち，論理が貫かれているというより，感情に流される場合が多い。そして民衆を理想化してしまう。Sand は民衆を愛し，とけこみ，その現実のままの民衆を理解しようとする。d' Agoult はいつも冷静であり，政治家の目で観察判断する。政治家による政府を理想とし，二月革命を政治的社会的革命ととらえながらも，民衆を抽象的観念的にしかとらえられなかった憾みはある。

〔1848 年革命史〕　「政治的動揺の最中にまた烈しい議論の沸騰する議会を傍聴した後でまた騒擾が街中にひしめいている[10]」 3 月にこの革命史の執筆に着手したと述べている。3 月 14 日にはすでに Pascal Duprat に第一章を読んで聞かせている。「1848 年革命史」は 1850 年から 1852 年にかけて 3 回にわたって発表された彼女の代表作で，革命前夜からナポレオンのクーデタに至る大部の歴史であるが現在もなお 48 年の最も精細で，科学的精神に貫かれた歴史書の一つとして評価されている。膨大なデータを駆使し，ドラマチックな場景描写，登場人物の活写に優れていると同時に一般化する技術に長けている。

Introduction では彼女の歴史哲学とでも言うべきものを述べると共に革命に至る歴史を概説する。諸民族の生活は生成と崩壊とを同時に行う絶え間ない変転であるという観点にたって，社会の危機である革命もまた崩壊と形成の仕事を早めている。この二月革命は政治社会革命であって革命を進化の相でとらえ，18世紀以来の思想行動の自由の自明の結果である述べている。近因としては Louis Philippe の時代に商業産業の自由化のもとに新らしい社会状況「産業プロレタリヤ」という国家の中に別の国家が生まれたのであり，この事態に対して二人の学者，Saint-Simon と Fourier が夙に警鐘をならしていた。「最も人数の多くて最も貧しい階級の運命をできるだけ早く改善する」ことや「産業社会の新世界」を説いていたにもかかわらず，Louis Philippe は成上りブルジョアの水準を保とうとし，偉大さと愛のない政治をしたため当然の帰結としておこった革命であると述べる。

これを書く時，Daniel Stern は *Considération sur la Révolution Française* の著者 Mme de Staël を念頭においていたのであり，女性として *Corinne* の作者につぐ第二の歴史家を目ざしていたと思われる。この時期（1848-53）に

Mme de Staël に関するノートをとっていたことや Mme de Récamier を訪問して取材しようとしたことからも明らかである。彼女のサロンは社会主義者から正統王朝派，オルレアン派とあらゆる色合いの思想の持ち主が集う場で，ふつうのサロンと異って政治思想が論じられる政治サロンでもあった故，Daniel Stern がこの 48 年の歴史を書くのに最適の人物であると自負したのも無理からぬところである。彼女のものが発表される以前に多くの 48 年史が出版されているが，彼女が参照したであろうと思われるめぼしいものとして，

Lamartine; Histoire de la Révolution de 1848 (1849)

Louis Blanc; Pages d' Histoire de la Révolution de 1848 (1850)

Eugène Pelletin: Histoire des trois journées de 1848 (1848)

A. Delvau: Histoire de la Révolution de février (1850)

Elias Regnault: Histoire du gouvernement provisoire (1850)

〃 Histoire de huit ans (1840-48) (1848)

Charles Robin: Histoire de la Révolution Française de 1848 (1849-50)

があげられる。これらの著書には時代の証人としての体験記的要素，また自らの行動の弁明的要素が多い。彼女には偏よらない公平な歴史家たらんとする気概があって，第一版の付録に次のような資料を付している。

1) Programme du journal la Réforme, rédigé par L. Blanc.
2) Lettre de M le prince de Joinville à M. le Duc de Nemour 1847.
3) Déclaration publiée par les journaux de l'opposition le 22 février 1848
4) Acte d'accusation déposée par M. Odilon Barrot dans la séance du 22 février 1848
5) Déclaration du comité électoral démocratique publiée le 24 février 1848
6) Proclamation de M. Odilon Barrot, trouvée dans le cabinet du ministre de l' intérieur le 24 féverier 1848

また第二版の付録として次のような参考資料が列挙されている。

- Proclamation de M. Cabet 25 féverier 1848

- liste des clubs;
- liste des journaux;
- journaux sans date mais publiés du 24 février au 4 mai 1848;
- Journaux du 1er au 4 mai 1848;
- Liste des deputations reçues par le gouvernement provisoire;
- Declaration des droits de la Femme par Olympe de Gouges;
- Extrait d' une lettre de M. Louis Blanc;
- Proclamation du gouvernement provisoire;
- Serment d' Abd-et-Kader
- Abd-el-Kader au gouvernement provisoire;
- Lettre du Général Cavaignac, 27 mars 1848;
- Petitions des ouvriers;
- Liste des candidats du peuple;
- Liste par ordre numérique des suffrages obtenus par les cadidats à l' Assemblée nationale élus dans le département de la Seine;
- Résumé du recensement des ouvriers des ateliers nationaux au 19 mai;
- Etat des principales arrestations politiques du 15 mai au 22 juin 1848;
- Projet de proclamation présenté par V. Considérant;
- Proclamation du gémeral Gavaignac 24 juin, aux insurgés, à la Garde nationale;
- Proclamation des insurgés;
- Déposition de M. de Guise, chirurgien en chef de la Garde nationale, 11 juillet 1848;
- Proclamation du préfet de police aux habitants de Paris 26 juillet 1848;
- Note sur les principales causes qui ont amené les evenements de juin et sur les divers élements de l' insurrection;
- Extrait des *Mémoires* de M. Bastide. *Encyclopédie moderne* tome Ⅶ, article juin

1878 年第三版には更に次の付録がつけ加えられている。

- Lettre du général Changarnier
- Lettre du Prince Louis Napoléon Bonaparte
- Proclamation et ordre du jour du duc d' Aumale;
- Adresse des ouvriers imprimeurs sur etoffe. Remerciments du gouvernement provisoire;
- Proclamation du gouvernement provisoire 30 mars 1848;
- Considération sur l' abolition de ía contrainte par corps et de l' exposition publique;
- Abolition de la peine de carcan, décret du gouvernement provisoire;
- Proclamation de M Emile Thomas aux ouvriers du bureau central des ateliers nationaux;
- Lettre de M. Delessert à M. Caussidière 29 avril 1848

版を改訂する毎にかなりの書き足しをしたことは言うまでもない。

更に口頭で直接得られる情報，証人としては彼女の周囲には第一級の人々に事欠かないが，まず Louis de Ronchaud は前述の如く Lamartine の内閣付事務長の役を務めているし，Bois de Comte は Turin に派遣されてイタリヤの情報源になっている。旧王朝の政府高官であった Louis de Viel Castel も彼女の親しい友人であるが，チュイルリ宮の精細なドラマに通じている。また多くの新聞の編集長と昵懇の間柄でもある。例えば La Presse の E. de Girardin, Peuple Constituant の Lamennais, と彼の右腕の Auguste Barbet, Revue Independante の Pascal Duprat, National の Littré, Populaire の Cabet, République の Gueroult などである。また 1850 年後半には亡命していた Louis Blanc とも文通をはじめ，Jersy 島にわたって会見さえしている。Louis Blanc の手紙には彼女の質問に答えてどのようにして彼の提案した進歩省，労働省が拒否されて，予算の裏付けのない Commission du Travail が設置されたかとか，45 サンチーム税に関して L. Blanc が強い反対を表明したことなどが証言されているが，必ずしも Blanc の意図に沿って使っているのではなくて，彼の証言を使いながらも他の情報の中にうまくとり入れて，あくまで公平

な立場をとろうとしている努力がよくわかるのである。また Dr Guépin は当時有名な眼医者で，d' Agoult も治療をうけているが，彼は Cabet の信奉者で熱烈な共和主義者であるところから，革命後 Nante 地方に派遣された共和国政府委員であった。彼女は地方の資料集めを彼に頼み，この二人の書簡をみれば彼女の地方についての情報はほとんど彼に負っていると思われる。また Blanqui, Barbès の経歴，Bonaparte の生活などについても意見を求めている。その他 Charras, Ponsard に六月事件の折の軍隊の配置，Sobrier についての資料を求める書簡が残っている。このように彼女の正確を求める情熱は類をみないのであり，Jean Cassou は愛の生活に失敗した後，「Daniel Stern は一つの知恵を見つけたのであり 1848 年革命史の出版後，Littré も評価しているごとく[11]」彼女が ≪落胆も興ざめも譲歩も招来させない一つの物の見方を持った≫ と *Quarante-Huit* に述べている。また他にも第二部 25 章全体がヨーロッパの革命にあてられていることをとっても，如何に国際的視野をもっているかがわかるのである。彼女の生活の場がフランス，ドイツ，スイス，イタリヤと四国にまたがり，生まれがドイツとフランスの血を受けていることが必然的に彼女を国際的視野にたたせたのであろう。外に多彩な国籍の友人が彼女の周囲に多かったこともプラスしていたと言えよう。

しかし若し彼女の革命史を通じて誰の立場に最も近いかと問うならば，それは言うまでもなく革命のオルフェ Lamartine であろう。赤旗を退けて三色旗を採用させた颯爽たる Lamartine の姿を描き，六月事件でも民衆が勇敢に戦う様を感動的に描きながらも Cavaignac 将軍が共和国を救い，祖国に功績があったとする見方，Poitier 街の Thiers ら反動派の策動に反感を示し，Louis Napoléon に対するきびしい批判などにそれがうかがわれる。

最後に彼女は自分の著書を帝政のこの時期に発表する勇気を持つ自負とこの著作に対する自信がよみとれる手紙を友人 Hortense Allart に宛てて書いているのを付すことにしよう。

「この著書の唯一の長所はその発行日です。実際これは勇気のいる行為だと思います。この出版がどんな結果をうみだしうるかについて皆さんがいろいろ忠告してくれましたので，私はこれを軽卒に出したのではありません。私はあな

たにだけ，誇り高き女闘士(アマゾンヌ)のあなたにだけうちあけますが，一人の女が時には戦いにおいて男達に比肩できること，恐らく少しばかり凌駕することもありうるということを示したかったのです。そしてこの戦いは偉大ですばらしい戦いです。何故ならそれは政府の形体云々の問題ではもはやなく，人間精神の威厳と良心の自由を問題としている戦いであるのです。」(1853年8月8日)

注

1) 駒沢大学外国語紀要7号 "G. Sand et la Révolution de Février"
2) *Essai sur la liberté* では離婚問題や女性の教育にふれている。
3) Comtesse d' Agoult et son temps 2. p. 24
4) ibid
5) Marie d' Agoult par Aragonnès p 136
6) Quarante-Huit p. 117
7) Comtesse d' Agoult et son temps 3, p. 16
8) ibid p. 29
9) ibid p. 29
10) ibid p. 71
11) Quarante-Huit p. 128

Bibliographie

Daniel Stern; Révolution de 1848 — Lib, internationale Sandré
; Essai sur la liberté — Michel Levy fr. 1865
; Memoires (1833-1854) — Calman Levy 1927
; Esquisses Morales — Techener 1859
Correspondance de Liszt et de Madame d' Agoult — Grasset 1934

* * *

Marie Octave Monod; Daniel Stern — lib, Plon
Clande Aragonnès; Marie d' Agoult — lib. Hachette
Jacques Viers; La Comtess d' Agoult et son temps 6 vols. — Armand Colin
Jacques Viers; Daniel Stern. Lettres Républicaines du Second Empire — éd. Cèdre
Roger Picard; Le Romantisme Sociale — éd Brentano
Jean Cassou; Quarante-huit — Gallimard
G. Sand; Lettres d'un Voyageur — Michel Levy
H. Balzac; Béatrix — Cl. Garnier
Dominique Desani; Flora Trirtan — 10/18
Seché Léon; Hortense Allart de Méritens — Société Mercure de France